みな強盗也、竊盗はひそかにぬすむと訓じて、人めを凌ぎ、形をかくし、垣壁を切りぬき、ひそかに財寶を奪ひ取るを云ふなり、○略下

〔倭訓栞前編二十一〕ぬすびと　倭名抄に偷兒を訓せり、盗人の義、金葉集によめり、せこ盗人牛祭文に見ゆ、今小ぬす人といふが如し、鈔もよめり、東坡詩に、開戸夜無鈔と見えたり、鈔略の義也、周禮注に、鳥鳶喜鈔盗便汙人、　枕草紙に、いみじきぬす人かなと書るは、只人ならずとほめんとて、されていふ辭也、禪語に老賊といへるが如しといへり、今もしかり、人を罵ていふ詞に、大盗人といふは、竹取物語に見えたり、袖にくらぶといふ俗語は、衆妙集に、

一枝の花ぬす人となりにけり袖にくらぶの山の歸るさ、盗人に鑰といふ俗語は、史記に、藉寇兵而齎盗糧者也と見えたり、盗人の脚といふ草は天麻也、仙臺の稱也、

〔物類稱呼一人倫〕盗賊、ぬすひと、　美作邊及東海道にて、ゑら、といふ中國、四國、ともにまれにじらといふ、但しし、らなみの略語にや、白波ノ故事ハ後漢書ニ出、武藏及上總下總邊にて、せれうともいふ、近衛龍山公、薩摩の方言にて詠給ふ歌に、ぬすとで、おらぶにはたとたまがりてくわくさつからにせ、くりぞする

〔壒囊抄〕盗人ヲ白波ト云ハ何事ゾ、後漢孝靈皇帝、中平元年、張角ト云者黄天ト名ヲ揚テ、黄ナル巾ヲ蒙ル者卅六万人ヲ相隨、謀叛ヲ巧ムニ、皇甫崇ト云者是ヲ破リヌ、其餘黨共西河白波谷ト云所ニ隱居テ、諸國ヨリ上ル財寶ヲ掠取ケリ、時人是ヲ白波賊ト云、此ヨリ始テ盗人ヲ白波トハ云也、仍和語ニシラナミト云也、凡白波ヲバ海賊ニ用ヒ、緑林ヲバ山賊ニ仕ト云共、山立ヲシラナミト云侍ベリ○略下

〔燕石雜志四〕白波、緑林の故事によりて、盗賊をしらなみと唱へ、みどりのはやしといふは、しかるべし、これを眞名に、白浪と書ときは、その義に稱はず、眞名には白波と書べし、又盗賊を、今俗は、どろぼうといふ、とろはとる也、るとろと通ず、暴は暴戻暴惡の暴なるべし、しかるに世俗は、只其角が五元集に、泥坊や花の蔭にてふまれたり、といふ句を見て、泥坊と書ものあれど、泥坊は、原來假